

「赦し合いなさい」平和聖日

2022年8月7日

エフェソの信徒への手紙4：25～32

佐々木 佐余子

今朝は平和聖日として礼拝を守りますが、最初にいつものように、エフェソの信徒への手紙を学びたいと思います。

25節を読むところあります。「だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです」とあります。このお勧めは教会のクリスチャンに語っているのです。クリスチャンは洗礼を受けて教会生活を続け、信仰生活をしているはずなのに、偽って生きていたのでしょうか。ただここを読むと時代考証をしなくてははいけません。今から約2000年も前のことです。今のように文明・文化もあまり進んでいなかった頃です。いきなり今の時代と比べても無理があると思います。人は洗礼を受けたからと言って、急に天使になれるわけではあるまいし、少しずつ向上するのです。エフェソ教会でぶつかり合いがあったのでしょうか。それは当然であって議論しながら向上するのです。でも、議論も出来ないで硬直化する場合があります。そうすると大変な事になるのです。26節「怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません」とあります。教会員同士の生々しい記録が残されています。相互に怒って罪を犯す人もいたのでしょうか。その結果、悪魔にスキを与えてしまった人もいたかもしれません。想像すると恐ろしいことです。そして、28節に「盗みを働いていた者は、今からは盗んでははいけません」とあります。多分、奴隷がご主人のものから何か無作法をしたのかも知れません。その当時の社会では、盗みや詐欺など普通にあったようです（今もあります）。パウロは仕事をしていたので、「労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい」と教えました。29節に悪い言葉とあります。悪い言葉とは何でしょうか。悪い言葉とは人の悪口でしょうか。悪口とは辞書を引くと、他人の言行に対してマイナスの批評をくだすこと、とありました。人間は完全ではないから、どうしても粗が見えるのです。また、自分の価値観と違うと批判するのです。言わない方がいいに決まっているけれど、でも、それによってその人がどのような人なのかわかる場合もあります。どの社会も悪口はつきもので、教会も例外ではなかったのでしょうか。パウロは言います。「聞く人に恵みが与えられるように、その人を作り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい」と教えました。悪口といっても、ただの悪口ではなくその人が成長するように助言を与えられるようなそのような建設的な言葉を語りなさい、と言っているのではないのでしょうか。30節にこのようにあります。「神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです」と語ります。それは信仰の勧告です。わたしたちキリスト者は聖霊の宮とも言われています。第一コリント書にあるように、「知らないのですか、あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや、自分自身のものではないのです」「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。だから、自分の体で神に栄光を現しなさい」と教えています。ですから、悪口

を言うにしてもその人とまた自分をも汚さないように注意しなさいと教えているのです。わたしたちキリスト者は、すでにキリストによって贖われているから、きたるべき主の来臨の日に救われることが保証されている、と教えたのです。ある教会に婦人がおられました。その方は、大変温厚な方でした。ところが、ある日、主日礼拝の司会で、このような牧会祈祷をされました。「神さま、わたしは人の恨みを50倍にも100倍にもして返す者ですが、どうぞ、お許してください」と祈られました。初め耳を疑いました。このような方でも、心では煮えたぎる思いを持っておられ、それを隠すことなく吐露されお祈りされた、と思いました。そして、ますます親近感を持つようになったのです。なかなか人前では祈れないことです。パウロは31節で「赦し合いなさい」とお勧めをしています。でも人を赦すことは本当に難しいことです。でも主イエス・キリストが道を開いてくださいました。十字架の七つのみ言葉。頭は割れんばかり、肉体の痛みは限界を超え、息は絶え絶え、そのような中で人を赦されて天に召されました。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 23:34) 人は赦すことは難しいけれど、神さまは時を与えてくださり、少しずつ和解の道へと導いてくださいます。時薬ですね。

今朝は平和聖日です。平和で大切なことは和解ではないでしょうか。赦し、赦され和解する時は、一番の喜びです。どんな喜びよりもうれしいです。来週15日は77回目の終戦(敗戦)記念日です。あの大戦時において、わたしたちの所属する日本基督教団が戦争にどのように対応していたか、1年に1回でも覚えることは大事なことです。関東教区「日本基督教団罪責告白・リタニー」を読むと、あの戦時下において厳しい統制下にあり、日本人が軍国主義の只中で生活していたことを覚えます。過去に日本基督教団の行ったことを風化させないために、皆でリタニーを交読することは大事ですね。先週の6日(土)は広島に原爆が降ろされました。そして、今週の9日(火)に長崎に原爆が降ろされました。どうして2回も、と思います。一面は焦土と化しこれから草木1本も生えないだろうと言われました。大人になって録画の玉音放送を聞きました。人々は地面に座り、身を低くして雑音のするラジオを聞いていました。泣いている人もいました。でもこれで、やっと戦争が終わって内心喜んだのではないのでしょうか。1945年8月15日です。その後、9月27日に昭和天皇はアメリカ大使の公邸の門をくぐり、マッカーサー元帥と会見しました。マッカーサー元帥は、てっきり命乞いをしに来たのだと思っていたのです。ところが昭和天皇は驚きの発言をしたのです。「戦争の責任はわたしにある。海軍や陸軍はわたしが任命したのだから彼らに責任はない。わたしの身はどうなるとも構わない。どうか、国民が生活に困らないよう連合国の援助をお願いしたい」と言われたそうです。マッカーサー元帥は深く感動して、こう言ったそうです。「かつて、戦い敗れた国の元首でこのようなお言葉を述べられた人はいなかったと思う。わたしは陛下に感謝したい。これからの占領政策の遂行にも陛下のお力を請わねばならない。どうか、よろしく申し上げます」と言ったそうです。マッカーサー元帥も立派だと思います。この方は、聖公会のクリスチャンだそうですよ。それで、東京大空襲の時

も、立教大のチャペル付近は爆弾を落とさなかったそうです。その後、キリスト教の一大ブームが来るのです。教会に青年たちが沢山集まって礼拝し、集会を持ったそうです。でもマッカーサー元帥が帰国したら静かになったそうです。マッカーサーは陛下の元首としての罪を赦したのではないではないでしょうか。でなければとてもあのような言葉は出なかったと思います。「わたしは陛下に感謝したい」と。戦争で勝った国が、負けた元首にこのような言葉を言うのでしょうか。それ以後、日本は象徴天皇制の下で国が治められることになったのです。ですから、キリスト教の力は偉大ですね。日本がこのように安寧に生活できるのはキリスト教のお陰なのです。もし、あのような相互の会見がなかったら、当時中国が日本を狙っていたので、日本は中国化していたかもしれません。

今朝のテキスト（本文）は、「新しい生き方」をパウロは示しています。エフェソ書の執筆された時期は、紀元60年から63年頃です。その当時ローマ皇帝はひどいものでした。ですけどパウロはしっかりと人の礼節・生き方・道徳を教えています。パウロは言います。「わたしたちは体の一部なのです」と。そういうことを普通言えるのでしょうか。一つの体があり、皆がそれぞれ手や足になり、頭や目や耳になって活動しているイメージですね。大胆な言い方です。想像してみてください。ここにおられる誰かさんが手や足になり、頭になり、目や耳になって活動している姿。つまり、お互いが一体なのだから、と教えているのです。そういわれるとどのような反応でしょうか。「嫌だわ」と思う人もいれば、「あら、うれしいわ」と思う人もいるでしょう。けれど、どう思っても私たちは一つの体なのです。それは、主にある交わりを示しています。ある人が病気になれば、一生懸命、先輩は説明します。「ああした方がいいわよ、水を一杯飲みなさい」とアドバイスします。ある人が何か起こせば、心配してくれて、助言をしてくれます。わたしにはお兄さんがいませんが、何だかお兄さんが心配してくれているみたいで不思議な気持ちです。「ああだから、こうだから」といつてくれるのです。こういうのが主にある交わりなのか、と思いましたよ。「悪魔にすきを与えてはいけません」とパウロは言います。パウロは悪魔にすきを与えたことがあるのでしょうか。悪魔にすきを与えるとはどういうことでしょうか。ある人が良いことを思いついたとして、それをしようとした時、ふと心が動いて、魔が差すというのでしょうか、悪い方向に心が変わることを悪魔にすきを与えるというのだと思います。何者かが、わたしたちの心に働きかけ、弱い人間はそれになびいてしまうのです。その人は悪の支配下に入ってしまうのです。テレビドラマを見ていると、そういう場面がしょっちゅうです。ですから視聴率が上がるのですけれども。聖書はこの支配する悪の力、悪の結晶を悪魔と言っているのです。わたしたちが毎週唱和する「主の祈り」で、<われらを試みに合わせず、悪より救いいたしたまえ>との祈りは、悪魔に機会を与えないよう、神の力をお与えくださいという祈りなのです。そして、最後に「神の聖霊を悲しませてはいけません」と教えます。聖霊も悲しむことがあるのです。率直な気持ちです。聖霊は神です。神は人間の様子を見てどんなに嘆き、悲しんでおられるでしょう。特に今は嘆きのどん底におられるのではないのでしょうか。数えたら

きりがありません。ウクライナとロシアの戦争はたくさんの尊い人命が失われています。一体、いつ止むのでしょうか。アメリカと中国の覇権戦争、どっちが上か、どっちが下か、そんなに世界を制覇したいのでしょうか。お互い赦し合う、和解は難しいけれど、でもそうしないと世界が滅びてしまうのです。滅亡するのです。「パウロの赦し合いなさい」は、今日の警鐘でもあります。